

海游録

朝鮮通信使の日本紀行

申 維 翰
姜在彦 訳注

136

植え、竿には盆の如き燈を懸け、そのなかに燭を点じて晃朗瑩耀、かくの如きが五歩ごとに一對となつてゐる。夜が昼の如く明るい。

このとき使行は実相寺に入った。改めるべき服が、遅々として届かない。余に従う童子と従僕は後ろにあり、乗馬してやや間をおく。余は、ひとり、六、七人の倭人とともに街を通り抜けた。見物する男女の綿繡の服は、眼にきらびやかなこと大阪よりも倍蓰（倍も五倍も）する。路の左方には二層楼があり、縹緲として半空に聳えたつ。名を東寺という。

東寺を過ぎると、層楼、宝閣が金銀色にきらめくもの、いちいち記録するにたえず。神しんが疲れ眼が熱くなって、いくつの町を通過したかも知らない。月色と燈光とが、上下にあつて涯がない。宵に行くこと数十里、千万の奇観を閲するに、みな、かつてこの世間の経たるものにあらず、恍惚として、あたかも、琪花（仙境にあるという美しい花）叢裡に蓬萊白金仙閣（神仙が居るといふ海島の宮闕）を見るような気がする。

余はすでに倭語を聞きなれていて、ときどき理解しうる言葉がある。そこで、頻々として倭人を喚び、飲茶や喫煙を索め、道里を問う。倭人はたちまち大いに歓び、それに応じてくれる。列肆の茶姫は、玉のような顔に黒い髪、手で神仙爐の按排をしながら、煎茶をもつて接待してくれた。それはさながら、画中の人に似る。ときに、街にありて、たちまち金鉄の錚々たるを聞く。余は驚いて、「何の声か」と問う。倭人曰く、「夜が深まれば、巡街者が鉄